

このおとど、子どもあまたおはせしに女君たちは嬉とり、男君たちは皆ほどほどにつけて位どもおはせしを、それも皆方々に流されたまひてかなしきに幼くおはしける男君・女君たち慕ひ泣きておはしければ「小さきはあへなむ」とおほやけもゆるさせたまひしぞかし。帝(みかど)の御おきて、きはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じ方(かた)につかわさざりけり。

(日本古典文学全集『大鏡』(小学館)(傍線筆者))

補説②

この詩の対象である道真の「我が子」を詠む作品として、『菅家文章』『菅家後集』の中で明らかなのは次の四篇である。

- ① 「117夢阿滿」 (七言古詩) (『菅家文集』) ↓ 補説②
- ② 「260言子」 (七言古詩) (『菅家文集』)
- ③ 「483慰少男女」 (五言古詩) (『菅家後集』) ↓ 本稿
- ④ 「503秋夜」 (七言絶句) (『菅家後集』) ↓ 補説②

この四首のうち①と④については後述する。②の「260言子」は、我が子を詠む視点に、陶淵明の詩「責子」に通じるものがあるが、我が子の不才・不器量を嘆く建前を取りながら、実はいとしい子供たちを置き去りにして讃岐守として謫居している我が身を嘆くところは先の陶淵明が「酒」で子の不出来を慰めようと諦める句内容とは異質の句作りとなっている。